

第63巻の巻頭に当たって

編集委員長

白 井 宏

IRYO Vol. 63 No. 1 (3) 2009.1

雑誌「医療」の第63巻が始まるに当たって、編集委員長から一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

この雑誌の創刊は、筆者もまだ生まれていない昭和21年10月1日に遡ります。東京医療センターの図書室には、1巻からのバックナンバーが保存されていて、第1巻は昭和21年から23年にかけて刊行された第1号から第4号までを含んでいます。開いてみると、第1号は縦書きで右綴じであり、第2号以下は横書きで左綴じとなり、従って製本された第1巻は、第1号と、第2~4号が背中合わせになったような、両側から始まる製本スタイルとなっています。第1号の巻頭には、「発刊の辞」が医療局長官塩田廣重（本来は旧字体で鹽田廣重）先生によって書かれています。「昨昭和20年8月の肇國以来未曾有の画期的大事変発生に因って国内に種々の変革が行われたに連れて陸海軍病院も国立病院と改められ同時に傷痍軍人療養所も亦国立療養所と改称せられ従来の国立療養所も亦之に加えられて……」、「……広く一般国民の治療に任すべしと定められた……」（漢字は現在の表記に変更）と経緯が記されています。さらに、国立病院等の執務者は「博愛仁慈の根本精神に基いて」治療に当たり、特に医師はそれに科学的な裏づけを持つべきことを説いておられます。文末では、「……画期的業績が我々の病院、療養所から本誌に発表され本誌が世界的最善の雑誌となる日の到来せんことを熱望して発刊の辞とする。」となっています。戦後の混乱期にあって、一般国民の医療のために国立の医療機関が先進的な役割を果たして行こうという強い使命感を窺い知ることが出来ます。

その後、雑誌は国立の医療機関に勤務する人たち

の学術活動の公表の場として絶えることなく発行され続けてきました。その間の関係者のご苦労は多大なものであったであろうことは、編集委員を3年弱務めただけの筆者にも想像に難くありません。

言うまでもなく、この雑誌「医療」は国立医療学会が発行する機関誌です。国立医療学会の特色は、職種を横断し、国立高度専門医療施設、国立ハンセン病療養所と国立病院機構を含め160施設以上に及ぶ巨大な病院群の職員を中心とした学会という点にあると考えます。創刊当時と現在とを比較すれば医学・医療の変化は極めて大きいものがありますが、多職種がお互いを尊重しあいながら、チームとして患者を援助していくというチーム医療の進化も際立った変化のひとつと言えましょう。全職種が関わるこの学会の機関誌として「医療」は、専門分野の雑誌とは一味違う、すべての職種の人々にとって価値ある雑誌を目指していくべきであります。幸い、昨年の11月には、年会費の改定も行われ、医師以外にも多数の職員の入会が期待されます。また国立病院総合医学会には附属学校の学生も参加しています。創刊当時は医師のみが執筆していた「医療」にも、今は医師以外の各職種の方の執筆が稀ではありませんが、尚一層優れた論文が多くの職種、そして学生からも投稿されることを期待しています。この雑誌が、今後も国立の医療施設の職員にとって、その活動を世に問う場として有用であり、広い意味で患者さんにその利益が還元できる場であるよう、そして、「世界的最善の雑誌」に少しでも近づけるよう、編集委員会も気を引き締めて努力したいと考えます。各位のご指導とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。